

大艱難後の携挙

2009年8月16日 アシェル・イントレーター

最近のニュース

マアリヴ誌のラケル

イスラエルの第二の新聞であるマアリヴ誌は私たちの親愛なる姉妹であるエイン・ケレムのラケルさんについて4ページに渡って大きく取り上げました。ラケルさんの写真は非常に人気のある週末誌の表紙を飾りました。記者は世俗の人ですが、記事は非常に肯定的で、メシアニックジャーナルに関して今の段階においてイスラエルのメディアが取り上げる一つのハイライトとなっています。どうかラケルさんの救いの証が何十万もの人々の心に触れますよう、至急お祈りください。

韓国のヨニ氏

今週イスラエル国会のメンバー10名がソウル市に到着し、韓国国会のメンバーと共に友好的なサッカーを行いました。このイベントはイスラエルと中東諸国との間で友好的な関係を築く幅広い活動の始まりでした。このプロジェクトはヨニ・ユンというヘブライ語を話しイスラエルを愛する韓国人クリスチャンが計画し、始めたものです。どうかこれらの活動を通してイスラエルと中東諸国との外交関係が成功するようお祈りください。

マリヤムとマルツィエ

インターネット上に、イラン在住のイスラム教の家庭出身のクリスチャンであるマリヤム・ラストムプーアさん(27)とマルツィエ・アミリザデーさん(30)という二人の若い女性について報道している記事があります。彼女たちは3月5日に捕らえられました。彼女たちは「背教者」ということで告発されています。数ヶ月間彼女たちはイランの刑務所でひどく苦しめられています。彼女たちは厳しい司法当局の前で大胆に証をし、信仰を捨てることを拒否しました。どうか彼女たちの力、自由のために、彼女たちの証がメディアを通して数百万の人々の心に触れますようにお祈りください。

大艱難の後の携挙

終わりの時の中心となる出来事はイエシュア(イエス)の再臨です。その出来事に至るまで戦争や艱難が起こります。再臨の時、聖徒たちが変化し空中に持ち上げられる携挙と呼ばれる超自然的な出来事が起こります。

携挙に関して7つの基本的な状況を説明する箇所があります。ある人々は大艱難の前に携挙が起こると教えていますが、これらの7つの箇所はすべて明白に大艱難の後に携挙が起こると述べています。

1. **マタイ 24:29 「苦難に続いて」**オリブ山での予言で、イエシュアはご自身が栄光を帯びて来られることを語り、御使いを遣わして四方から選びの民を集めるのです。これは、「これらの日の苦難に続いてすぐ」と述べられています。
2. **マタイ 24:38 「その日まで」**イエシュアはご自身の再臨とノアの大洪水とを比較しています。ノアが箱船に入るその日まで人々は食べたり飲んだりし、そしてすべては破壊されました。主の再臨とすべてのものの破壊との間には間隔はありません。艱難との間には何の期間はありません。イエシュアの再臨時に、畑にいる人で、一人は取られ、一人は残され、二人の女性が臼をひいていると、一人は取られ、一人は残されるのです。
3. **マルコ 13:24 「その苦難に続いて」**マルコは、オリブ山での教え、マタイが大艱難、再臨と携挙について説明しているすべての詳細を繰り返しています。彼はまた携挙は大艱難の「後」だと繰り返しています。
4. **ルカ 17:27, 29 「その日まで」「その日に」**ルカは主の再臨をノアの大洪水と比較しているイエシュアの教えを繰り返し、さらにゾドムの破壊との比較を付け加えています。ノアについては、ロトのように、完全な破壊は直後に起こっています。すべての人々は最後までそこにいました。そこには時間差がありません。人々が取られた同じ日に、すべてが終わったのです。
5. **Iコリント 15:52 「終わりのラツパ(角笛:ショーファー)と共に」**終わりのラツパの時、死者はよみがえり私たちは変えられます。黙示録には、大艱難の間に7つのラツパについて述べています。(7つのラツパはラツパの祭り(レビ 23:24)、大贖罪日(レビ 25:9)の最後のラツパへとつながっています。)7つのラツパの後、大艱難の後、死者の復活の直後に携挙は最後のラツパの時起こります。
6. **Iテサロニケ 4:15 「主が再び来られるまで生き残っている」**もし聖徒たちが再臨までに地上に残っているならば、数年前に地から離れるということはありません。**15 節「死んでいる人々に優先するようなことは決してありません」**—**16 節「死者がまず初めによみがえり」**死者の復活が最初にあるのです。復活は大艱難の後に起こります。もし携挙が「それは決してありませんが」死者の復活より先行するならば、それは大艱難の後でなければなりません。その「時」にのみ私たちは空中に引き上げられ、主と出会うのです。(17 節)

7. IIテサロニケ 2:3「不法の人(中略)が現れなければ、主の日は来ないからです」パウロはその「日」に起こる二つの連続した出来事について述べています。すなわち、イエシュアの再臨と私たちが主の元に集められることです。この二つの出来事は同時に起こります。世界的な背教と滅びの子、すなわち反キリストが現れるまで、これらは起こりません。背教と反キリストは大艱難の間に起こります。もし反キリストの支配が最初に起こらなければならないとするならば、携拳は大艱難の後まで起こりません。

これらの7つの個所に、携拳のタイミングは大艱難の後に起こることを示しています。大艱難の前に携拳が起こるといふよく知られた教えは世界中のメシアの体にダメージをもたらします。

「注: マタイ 13:41 と 49 のたとえ話にも、またヨハネ 14:2-3 の「御父の家」についてのイエシュアの教えの中にも携拳について述べられています。」

諸国の教会はイスラエルと共に立ち、終わりの時の霊的な戦いに備えなければなりません。もし聖徒たちが、自分たちは大艱難の間地上にいないと信じるならば、彼らは準備が出来ておらず、不意打ちをかけられ、悪魔と反キリスト両方にとって格好の餌食となるのです。

イエシュアは私たちが艱難から逃れさせると約束したことはありませんが、私たちが強めて下さり、(ヨハネ 16:33「あなたがたは、世にあって艱難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」)そして守って下さるのです。(ヨハネ 17:15「彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守って下さるようお願いします。」)

イエシュアのように、終わりの時の間、勝利者であるようにと聖徒たちに教え、祈りましょう。教会が大艱難の前に携拳され、イスラエルを単独に地に残して苦しませ、反キリストと戦わせるという危険な、誤った教えを根絶しましょう。